

「眺め」の意識

「景観学」でなく「風景学」としたところに筆者の意図が集約されている。双方とも、周囲の環境に対する認識の中でも視覚に重点を置いたもの、と捉える事が出来るが、多少なりともこの分野に造詣のある人であれば、風景というのは個々人の心象をも反映するが、景観というのはある程度評価指標も定められたシステムチックなものといったイメージを持っているのではないだろうか。筆者の論点が前者のような、「眺め」と人間の関係を考えるところにあるからこそその「風景学」だろう。

本書は風景の「発見」から現在の景観論に至るまでの人々の意識の変遷を通史的に扱ったものと言える。いわゆる風景という概念は、「周囲の環境を眺める」という感覚の萌芽と共に始まったとされている。人々が自分の生まれ故郷以外の場に行くように、いわゆる旅行をするようになってから、それまではただの山でしかなかったものが「美しい山」として認識されるようになった。更にその後はそのような絵画的な眺めを保持する動きとして、国土保護運動や森林保存などが始まったことが述べられているが、面白いのは自然や環境を保全するのはあくまで「眺め」をキープするためであって、自然そのものを守るという立場は無かったことである。風景はこれらの事情により、その根拠となる土地や風土を離れた「美的な眺め」が独り歩きするといった宿命を背負うことになったと筆者は述べている。それでもまだ風景は、都市の統一的な規範、記念碑的なもの、上記のような自然保護のような名目を持っていた。しかし近代主義や近代建築の隆盛とともに人々の間に「周辺環境を意図的に変えられる」という認識が生まれ、風景の拠り所であった「環境」すら根こそぎ客観化されてしまった。

しかし、上述のような「風景の持つ意味」が喪失してしまったからこそ、そのような個人や地域共同体に依存しない普遍的な価値を持たせた眺めの概念として「景観」が登場することになる。筆者は「快適さ」が新たな美の指標として出てきたと述べている。更には快適さの代償として排除された個々人の美観を補完するものとして、デザイン・サーベイから提示された「生活景」が取り上げられている。人間の営みや日々の生活に美を見出そうという意味で、従来の景観や風景には無い視点である。ところが近代化を乗り越えようとした景観の概念でもてこずる厄介な「新しい郊外の眺め」も同時に生まれてきた。シミュラークルや、筆者の提唱するディズニーランド化という言葉に代表されるような、場所性に依存しないまがい物の眺めがそれに当たる。いわゆる「～風」と表現される眺めの拡大は限りなくバーチャルな景観を作り出し、それらの意味や場所による必然性はごっそり抜けおちてしまった。

そのような流れの中で筆者が見出した現代の風景に対する意識は「自分が風景になる」ことである。人間と眺めの関係性を説く立場としてはむしろ当然の帰結でもある。そもそも風景の起こりが周辺環境を自らから切り離すことであったことを考えるとこれは革命的な転換である。にも関わらず私たちは恐らくそれほどの大きな変化を感じていない。とすればこれが本来の風景の姿なのかもしれない。失われた場所性を、そこにいる人に求める姿勢こそが現代における「風景学」といえるのだろう。